

佐倉義民伝
明烏夢泡雪
百人町浮名読売

名作歌謡全集

十六

与話情浮名横櫛
百千鳥沖津白浪

昭和
東京創元社

名作歌舞伎全集

第16巻 江戸世話狂言集二

昭和四十五年七月十日 発行
(昭和四十六年十二月十五日 再版)

監修者

山本 二
戸板 康
利倉 幸
河竹 登志
郡司 正

発行所

株式会社 東京創元社
代表者 秋山 孝男

(店) 東京都新宿区新小川町一―十六
電話 (〇三) 二六八―八二三―一
振替 東京 一五六五

印刷・株式会社 金羊社
製本・株式会社 鈴木製本所
用紙・株式会社 富士川洋紙店
写真版・(株)興陽社、(株)万英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

目次 (名作歌舞伎全集第十六卷 江戸世話狂言集二)

佐倉義民伝 (佐倉宗吾) (装置図 釘町久磨次) 三

明烏夢泡雪 (明烏) (装置図 八木恵一) 四七

百人町浮名読売 (鈴木圭水) (装置図 高根宏浩) 六二

与話情浮名横櫛 (切られ与三) (装置図 萩原勝美) 四二

百千鳥沖津白浪 (鬼神のお松) (装置図 高根宏浩) 六二

解説

戸板康二

校訂について

郡司正勝

写真と資料提供—演劇博物館、演劇出版社、大谷図書館
沢村訥升、梅村豊、吉田千秋、高根宏浩、小山内徹

佐倉義民伝

(佐倉宗吾)



佐倉義民伝

戸 板 康 二

嘉永四年八月初日の江戸中村座に書きおろされた狂言。三代目瀬川如皐の作で、原題を「東山桜莊子」という、七幕の通し狂言である。今は「佐倉義民伝」として上演される。

この年、中村座は春芝居の石川五右衛門で、名人といわれた四世市川小團次が大当りをとったあと、四月の「小栗判官」で失敗、何とかして夏の芝居で景気を挽回しようとしていたが、立作者の如皐は、たまたま読んだ「地藏堂通夜物語」という実録本を材料にして、下総佐倉の領の義民本内宗五郎の事蹟を脚色しようと思いついた。

しかし上演決定までには、劇場関係者のあいだに論議が沸騰した。話をきくと、農民が主になって働く、つまり扮装からいっても、木綿の衣裳を着て出る農民を主としてい

るのである。

しかも作者が構想の上でかなり自信がありそうな、馬喰町宿屋の場は、宗五郎が直訴を決意し、仲間の村民に帰国をすすめる純對話劇であって、これでは見物がついて来ないという危惧があった。

しかし一同の反対をくつがえしたのは、座頭の小團次で、彼は絶対の抱負をもって、この役を生かしてみせたいといきった。それで上演がきまったのだが、座方が「木綿芝居」と呼んで不安な表情であけた初日から、想像以上の当りを見せ、ついにこの狂言は十月まで打ちつづけたのである。右のロングランは如皐の声価を決定、同時に小團次の名をも挙げ、番附を刷りすぎて、版木が磨滅してしまったという話が伝わっている。

実録として一般に流布する義民伝の要点は、次のようなものである。

佐倉の藩主堀田上野介は悪政を布いたため、領内の百姓が苦渋を極め、飢餓に瀕した。その時印幡郡公津村の名主本内宗五郎は、まず国家老に門訴、次に江戸家老に訴え、最後に正保元年十二月二日、上野に御成の將軍に直訴した。そのため宗五郎の一門は極刑に処せられた。

じつはこの騒動は、佐倉の旧領主千葉家の家臣が新領主に対する反抗だったといわれ、宗五郎も直訴以前に捕われ

たことになっているのだが、すでに講釈師の口演で、「佐倉義民伝」は、人々に広く知られ、現に佐倉には宗五郎と宗吾を祀る霊堂があり、劇にもしくまれた甚兵衛の渡しも、名所になっているほどで、つまり定説が出来ているのである。

宗五郎の「五郎」が、「御霊」という音に通じることから考えても、この宗吾霊堂の由来には、農村において凶作悪疫の厄を払うために祈った古来の民間信仰の根が深くおりていっていると見ていいのだが、今は通説義民伝そのものを紹介するにとどめておこう。

「東山桜莊子」の標題自身が示すように、当時としては当然これを別の世界に持って行く必要があったので、背景を東山時代つまり足利幕府のころに直したものであった。

嘉永のころ、東山の世界といえ、例の柳亭種彦の「田舎源氏」がまず頭に浮ぶものだったため、如草もこの脚本に、二幕ほどその「田舎源氏」を入れている。初演の時は、役名も木内宗吾（佐倉宗吾）を浅倉当吾としているが、以下煩雑を避ける意味で宗吾として書く。

場割でいえば、序幕はまず高津八幡の祭礼で、百姓たちが「曾我の対面」の村芝居をしていると、年貢上納の話がある、その芝居が中止になる所、次の仏光寺では代官が宗吾の妹に無体な恋慕をする所、代官役宅で宗吾が村方

の歎願書をさし出す所、呉竹塚で幻長吉が駕破りをする所。二幕目は人丸堂及び足利館で「田舎源氏」の筋がはいり、返し代官役宅で佐倉藤左衛門の召捕、伏見街道で按摩の辻占という場面があり、三幕目は堀田家門訴の場について、足利館裏門から藤の方寝所と、「田舎源氏」の筋になり、織越玄関先で隼人の諫言を見せ、四幕目が江戸馬喰町旅館屋の名主の会議から、甚兵衛の渡し、宗吾宅子別れとなる。

五幕目は紅葉の賀の浄瑠璃が入って、そのあと通天橋の直訴、六幕目が問註所で宗吾の拷問から一門の詮議があり、大詰が領主の病氣、そこへ宗吾一家の怨霊があらわれる筋になっていた。

この作が評判だったので、嘉永六年には「花雲佐倉曙」という浄瑠璃が出来、ついで文久元年八月の守田座で再演することになったが、小団次の要望で、黙阿弥が原作に大改訂を施し、「田舎源氏」の筋をぬき、仏光寺光然の祈りから入水を加えた。この時は直訴の前に「張良」を加え、將軍の夢にし、大切には佐倉宮祭礼の所作をつけている。

これが現在、「佐倉義民伝」として上演される脚本の原型である。再演の外題は「桜莊子後日文談」といった。

小団次によって創造された木内宗吾は写実的手法で表わすほかないため、歌舞伎の中でも、それに適する人と適し

ない人がある。再演の時、小団次は宗吾と新たに書き加えられた光然を演じたが、光然の祈りの場に出る難波村の十作をつとめた若き日の七代目市川団蔵が、小団次の舞台をよく見ていて、のちにこれを生涯の当り芸とした。最も正しい形で演技の伝承が行われたわけである。

近年では十一代目片岡仁左衛門、五代目中村伝九郎、そして初代中村吉右衛門、八代目松本幸四郎がこの役を演じた。吉右衛門の場合、宗吾、光然、堀田上野の三役を演じたのを見たが、台本は団蔵以来のものが残っている。

「佐倉義民伝」を通して出したのは、大正五年十月本郷座の伝九郎の宗吾の時と、昭和五年二月明治座の吉右衛門の時だけで、後者では特に門訴の場が、好評であった。

渡し場は、甚兵衛という役が重要で、甚兵衛に扮する役者の見せ場ともいえる。つまり、この役のよしあしで、成否が左右されるといってもいい。初演の時は彦三郎、再演は三代目仲蔵で、慌てたはずみに薬罐につまずき焚火を消す型は、仲蔵の工夫と伝えられている。

出してはならぬ舟のくさりや甚兵衛が鉦で切る所がこの場の眼目で、切ったあと棧橋にすべり、水音、なだれの合方にかかる所は、淋しいこの場面の中の唯一のやまであろう。

団蔵系の宗吾宅の子別れの型は、歌舞伎八十一号に三木

竹二の筆記がのっている。三人の子供を相手の「子別れ」は、めずらしい。

この場の装置は、上手に門口があるのが同じく、めずらしい例で、長吉の捕り物なども仮花道を使うと一層引き立つのである。

宗吾は妻子の動きの対象となる役で、辛抱と呼ぶ歌舞伎の役柄の分類に属するものであろう。派手な動きは一切なく、内面的に掘り下げる役なのである。この場面に幻長吉を出したのは、やはり気分を転換させるための、作者の用意だったと思われる。

おさんが去り状をつきつけられてのクドキ、そのあと立ち上った宗吾が、彦七、徳松に袂をとられる動きには、悲劇の演出としての典型的な手順がついている。

「無事でくらせよ」と宗吾がチョボにつれて立ち上る。彦七の出す笠を宗吾がとり、笠を引かれ、次に彦七に合羽をひかれ後へ戻り、左足を沓脱にかけてふり返ると、おさんが乳呑を見せるといった手順も、常套的ではあるがよくついている。

生垣をまたいで下手の藪に入ると、普通舞台が半まわりになる。彦七が合羽についたまま出て来るのを払い、花道まで行って雪にすべった心で七三で倒れる、窓からはおさんと徳松が見ている、窓の格子が一本外れるというような

段取りを、以前はつけていたらしい。

直訴の幕は紅葉の美しい上野東叡山の通天橋で、大道具の見事さを誇る場面でもある。將軍の御成に従う大名は、一座の名題が揃って出て、つきあうのが普通だ。その大名の中では松平伊豆守がいい役で、宗吾の訴状を読み上げ、願書を懷中、上包だけをかえす所で、腹を見せる。いわゆる重忠の役柄である。

九代目团十郎は明治十七年七月の市村座で、三世河竹新七の書いた「東叡山農夫願書」という実録劇の宗吾を演じているが、直訴の場では願書を差し出したまま、ほとんど観客に顔も見せずに入ったといわれる。彼には彼の主張があったにちがいないが、やはり歌舞伎は、そうしたものはあるまい。

吉右衛門はこの直訴の所の、思いつめた表情が印象的だった。

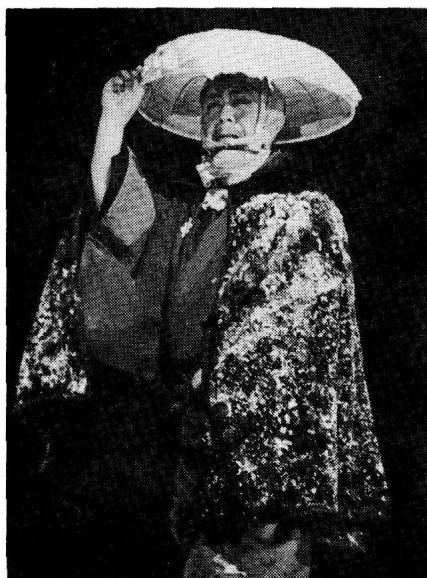
再演以後の光然のくだりは、全く別系統の狂言と見ていい。光然は宗吾の叔父で、せめて子供の命だけは助けてもらいたいと祈念をこめたが、その願がかなわぬと知り、珠数を切って印幡沼に入水する。この憤怒のクライマックスは、宗吾の部分の純写真に対して、荒事の水脈を引いたあばれの要素が入っている。動きにしても、壁をよじ上る「蜘蛛」、横に拡げる「蟹手」、平に開く「蛸手」があり、

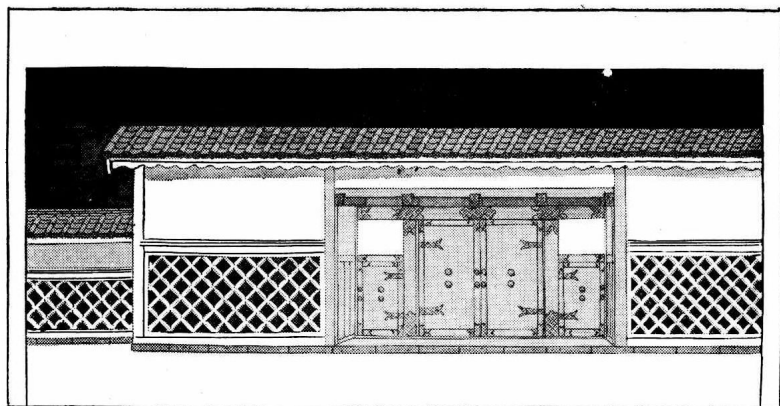
花道の引込みには、蜘蛛をつかう。

堀田上野の狂いは、紫の病鉢巻をした殿様がものに憑かれて苦しむ場面で、因果応報という意味では、この幕があると観客の気持ちも納まるが面白い芝居ではない。初演の時は、宗吾一家が礎柱を背負った凄い姿の幽霊で出る仕掛けおどろかせたらしい。

農民の反抗を主題にしたという理由から、昭和二十年終戦直後の東京劇場で、この芝居が早速出たということも、今となつては語り草である。

佐倉宗吾 松本幸四郎





堀田家門訴の場

序幕

堀田家門訴の場

役名 木内宗吾、植村隼人、河合左可馬、岩淵玄蕃、山住五平太、下役、山下丹下、同、川瀬平内、門番二人、中間四人、百姓大勢。

本舞台三間、朱塗り長広門。上下同じく朱塗りの出格子の門番所。その外塗り込め海鼠壁にて見切。すべて堀田家表門の体。総出の百姓、簀笠、腰に鎌をさし、詰めかける。この見得、風の音にて幕あく。

大勢 お願いでござりますく。

彦作 なんと皆の衆、こうして心を一致して、在所を出て

きたからは、死なば諸共じゃ。皆心をすえて、

米作 なんでも願いの叶わぬうちは、一寸でも動かぬ気でいさつしやれや。

雛十 どうか早う首尾して帰り、村の出来るよう、わしやアタべから念仏とお題目を百万遍上げようと思うたが、一人でははかゆかねゆえ、法蓮陀仏とやらかしております。

権十 そりや信心なこつちや。わしや成田の不動様一点張りややるつもり。のうまくさんまんだく。

米作 こうして皆の衆と連れだって、江戸へ願ひに出てきたものの、案じられることじや。

皆々 そりやまたなせに。

米作 さればわしはかゝめを一人置いてきたれば、どうも気がかりでなりませぬ。

彦作 エ、らつちもない、喰うと喰わぬの境じや、それどころではござらぬ。

雛十 サアく皆の衆、願わっしゃれく。

皆々 ヘイく願ひでござりますく。

トわやくいう。上手の潜門かづもんより侍二人、袴大小かちしにて出て来り、

侍二人 ヤアかましい、しずまれく。

ト言いながら出る。あとより袴形の侍二人、提灯を持ち、つきそい出る。

皆々 そりや出たぞく。

ト皆々騒ぐ。権十、彦作、雛十、米作、皆々をせいして、

権十 それ皆の衆、御役人様がござりましたぞ。

彦作 静かにさっしゃれく。

トこのうち、五平太あやも袴大小にて出て、

五平 御両所ごりょうしよ、彼らへ申し聞かし召され。

兩人 ハッ。

ト皆々に向かい、

丹下 定めしそれに控えしは、御領内の者ならん。

平内 かくの如く多勢にて、騒がしく申しても、その方どもの願ひはわからぬ。

丹下 夜陰やいんと申し、隣邸への聞こえ、夜明けてのち、それ

ぞれの係りへ願ひ出でよ。

平内 今宵は早く立ち去りおろう。

雛十 ヘイくお役人様方へお願い申し上げます。お国許おくににおきまして一同の者、お願いに出ましても、一向お

取り上げもござりませず、

彦作 意地の悪いわからぬ事ばかりおっしゃりますゆえ、このお願いはどうぞお取り次ぎの儀を、

皆々 ヘイくお願い申しますく。

丹下 エ、静まれく。

ト五平太前へ出て、

五平 御両所お待ちなされい。……ヤイく汝ら途方もない事を申しおるが、士民どみんの身にて御家老様へ直きく

願いたいなどと、なるほど士ほぜりと申す者はわからぬ者だわえ。コリヤやい、その方どもが、先の領主土井大

炊守同様と心得いるが、嫡子長門ちやくしちやうもん之助と申す若年者、い

ずくの浦へさまよいおるか。それらとは雲泥万里の違い、当時御老中たる織田政知公の邸へ向かつて、のほうでもない願ひ立て、よいわ、この上は老臣へなりと、殿へなりと取り次ぎは致してつかわす。取りついでつかわすぞ。

ト柔らかにいう。

皆々 ヘイ／＼ありがとうござりまする。

五平 こゝにおつては定めし寒からん。内へ入つて休息致せ。食事申しつけてつかわそう。……それ御番衆、開門々々。

ト呼ぶ。

米作 門の内に入れられたら、どのような目にあおうも知れぬぞよ。

彦作 そんな手で行くのじゃない。石の上にも三年というたとえがあるわ。なんでも皆の衆、こゝを動かさしやるな。

権十 そうともく。地震がいろいろが雷が鳴ろうが、こゝの砂利の上は動かさしやるな。

皆々 合点じゃ／＼。お願い申し上げます。お願い申し上げます。

五平 こいつら、どうも仕様のない奴ら。さようにぬかさば一々に縛り上げるぞ。

米作 それ縛るといわつしやるぞ。皆かくごして縛られしやれ。

皆々 縛られても動かぬぞ／＼。

ト皆々立ちかゝるゆえ、五平太、思入れ、

五平 ヤイ／＼そつと申せばくわつと申すと、しよのないう奴らじゃ。コリヤ出直して参ろう。

ト五平太、丹下、平内門へ入る。

雛十 サア、お役人もあの通りいわつしやるからは、彦作 皆氣を揃えて居さしやい。

権十 御家老様へお願いでござります／＼。
皆々 ヘイ／＼お願いでござります／＼。

トこの時、上手の潜りより、左司馬、大小袴にて、家来提灯をつけ出て、

左司 コリヤ、かしましい。静まりおらぬか。

トこのうち、宗吾も出て、捨ぜりふにて皆々をせいす。

左司 只今宗吾を門内に這入るよう申し渡せば、一同の者あやぶむ様子、コリヤ、只今門内には、老臣上村隼人殿出席にて、一同の願ひを執り成し下されん思し召し、宗吾、早く／＼御門内へ這入りましようぞ。

宗吾 ハッ、ありがたきその御意、御詞に随ひまして御門内に参りますでござりまする。

左司 イヤナニ宗吾、夜陰に及びかく御門前に多勢の者を

以て詰めおらば、却かえつて願ねがひの妨さまたげならん。ともかくもその方の詞ことばをもつて、一旦いつたん旅きょ宿しゆくへ引ひき取とらせるよう致いたすがよい。

宗吾 ハッかしこまつてござりまする。皆の衆、聞きかつしやつたか。ありがたいあなたの御ご仰ようせ、それにこうしてゐる時はかえつて願ねがひの妨さまたげゆえ、ともかくも引ひきとれよとおっしゃるから、マアわしに任まかせて、一旦いつたん旅きょ宿しゆくへ引ひきとらっしゃれ、引ひきとらっしゃれ。

彦作 どうして、宗吾殿一人なんでこゝにおかれべし。

米作 もしもの事があつてはならぬ。

権十 どうもわしらは分ぶん明めいならぬぞ。

雛十 そうだ。これは不安心でござるぞ。

宗吾 これはしたり、聞きわけのないも事による。あなたは河合左司馬様じゃ。安心して、皆の衆にはちつとも早く。

皆々 ようござるかの。

左司 ハテ、夜明けまでにはきつと吉きつ左右さう。

雛十 そんなら旅きょ宿しゆくへ、

皆々 引ひきとりましようか。

宗吾 サ、早く。

皆々 何分よろしゅう宗吾どの。

ト捨すてぜりふにて皆々入る。

宗吾 お役人様。

左司 身みと一緒に同道致せ。

トこの道具廻る。

本舞台。ト上の方に玄蕃、五平太。正面に隼人、次に左司馬。下手に宗吾そのほか諸士一人居並び、門番二人控え、かんぬき元の如くにつかけ、よろしく道具納まる。

玄蕃 コリヤ、佐倉領宗吾、その方が父藤左衛門、それに付きそう土民ども、上を恐れぬ強訴ごうその祟り、殿の上意に獄屋の糾明きうめい、定めしそれも聞き及ばんが、又ぞろ今宵、御門前に屯たちなすよし、すでに一々引つくり、獄屋へ打ち込み後悔こうかいさせんと思ひしところ、隼人殿が存意ぞんいに任せ、ざんじその儀は差しゆるす。その方一人呼びよせたわ。

五平 その申し口の儀によつては、一人も用捨はないぞ、きつと心得おらう。

宗吾 だん／＼とのお叱り、恐れ入りましてござりまする。……親藤左衛門はじめ、村々の者ども、牢舎らうしゃの事も承り、いかなる不調法ふてうはうあつての事か、その儀も御有免ごゆうめん願わしく、是非二百八十四ヶ村の者どもへ、御有免の御沙汰願いたく、それゆえに今宵の仕儀、御憐愍ごれんみんのほど願わ

しゆう存じまする。

隼人 われらが存意も、定めしきさうの心底にて願ひ出でし事と存ずる。その方一人これへ呼び入れたは、すでに昨日藤左衛門が願書の趣は、国元の者ども一同難渋、右体にて年を重ね、日を送らば、農民とたんの苦しみとの事、もつとも至極。この儀は殿より仰せ出されしのにみにあらず、国元の重役の者ども、申付方も如何な儀もこれあるべきに相聞こえしゆえ、これらは得と相礼し、非分の沙汰のなきよう、殿の御前で段々と、事のわけを願ひしに、殿にもおおかた御聞きずみ、その折柄にお国元より俄の飛脚、かの地において百姓ども多勢集まり、乱暴の始末上聞に達せしゆえ、殊のほかのお怒り、さるによつて御前において面皮をかきしその座の不首尾、ともかくもお国の実否を糺さんと、此方より見分の役人差し向けんと藤左衛門は役所に留め置き、その内に上意とあつて藤左衛門はじめ、つきそひ参りし者どもまで獄屋に引かれ厳しき糾明。……この儀さよう心得よ。

ト宗吾さてこそという思入れ。

宗吾 御意を承り、あなた様には取りわけて厚き御仁情、ありがとう存じまする。何卒お上の御慈悲をば。

玄蕃 ヤア、こいつがく。のろくと致した落ちつき顔。コリヤヤイ、その方が親藤左衛門はじめ、つきそひ

参りし百姓ども一同、獄屋の苦しみは自業自得、国元において騒動は、われらが仕出したことであらう。

宗吾 尤もこの程談じござりまして、私支配村々の人々、御代官船橋様のお宅へ罷り越し、又一年は、御国地方の御屋敷へ参りましたは、コリヤ別に仔細があつての事、この一条は私がその日のうちに取りしずめましてござりまする。

五平 まだ言いわけだて。……さくらの宮の祭礼にかこつけ、代官役所へ押しよせて我意をふるい、御主人の厳命にそむく、不届至極。それでも乱暴致さぬとな。

宗吾 アイヤ、それは全く街の風説、これにおいでなされます五平太様、既にその日まで御国元にお出でなされし儀でござりますれば、これらの儀は御存じでござりまする。

五平 ヤイ／＼言いわけがなきまゝに、身共まで引合いに出すな。もつとも身共その日まで国元にまかりおつた、その時に役所に出席、折から竹螺、鉦太鼓、眼前に身共が見ておつた。しかるに身共はその夜俄に、室町殿へ使者の役目、そのあとにての乱暴狼藉。

玄蕃 これでも乱暴致さぬと申すか。

宗吾 サ、その儀は、

玄蕃 たゞし厳命をそむくか、

宗吾 どういたして、

玄蕃 目明かしあつても、陳じおるか。

宗吾 サア、

兩人 サアくくく。

玄蕃 ドゞ、どうじゃ。

宗吾 ハア。

隼人 ア、コリヤくく宗吾、何をうろたえ当惑顔、申し開

きの筋あらば、それにてつづさに申し上げい。コリヤ、慈悲は上の御沙汰じゃぞよ。

ト思入れに言う。

宗吾 ハア、いかにも集まる人数が、代官所へ押しよせま
してござりまする。

隼人 ム、スリヤ御領地の、

左司 者々が、

宗吾 ハッ。

玄蕃 徒党の本人引つくまれ。

侍 ハッ。

ト侍二人、宗吾の手を取るをふり切り、一人足をつく。

五平 うぬ、手向かうか。

ト立ちかゝるを、

宗吾 全くもって、

左司 五平太どの暫く。……先刻よりその方には心得がた

き詞のはしぐ、国元騒動いたせし趣、私事とは心得ず。これには何ぞ仔細であらん。隼人殿も御出席、早くその儀を申しのべよ。

宗吾 コハ有難きそのお詞、この事つづさに申したけれど、さある時には恐れながら、殿様はじめその儀につらなる方々のお名前も出ます事ゆえ、

ト言いかける。

五平 何と。

宗吾 ものの起こりはわずかなこと。……

ト懷中より一通を出し、

お願い申しまするは、この一通に認めましたるそのいちいち、御披見の上、ひたすら慈悲の程を願わしゅう存じまする。

玄蕃 これへ。

ト取りにかゝるを、

宗吾 アイヤ、コリヤ隼人様へ御披見を。

ト左司馬とりつき、隼人へ渡す。隼人一々読むこと。

玄蕃 何さま口は調法なもの。おのれが頭取り徒党を結び、那領それくへ押しよせながら、殿の名の出る事、ヤレ人々の名が出るのと、この座をくるめるえせ方便。とにかく上村殿の取りあつかい、これにて見物致そうかい。

トこのうち、隼人、願書を読み終わり、

隼人 ハ、ア、さすがは宗吾、百姓大ぜい集まり、一度は徒党致せども、此所にて聞き置くわれ／＼には格別、他聞をはゞかり、演舌致さざるは神妙々々。ア……これでは何さま百姓ども、いっち致すまいものでもござらぬ。いかに玄蕃殿、お手前何と思し召す。

玄蕃 徒党の筋が何じややら、披見致さぬその願書、一向にわかりませぬ。

トにったり思入れ。

隼人 スリヤお国元のわけ御存じないとな。お読みなされい。

ト書面を玄蕃に見せる。玄蕃取って読むこと。さてはとういこうなし。隼人は宗吾に向かい、

いっぞや数人獄屋へ引かれし者ども、かつは藤左衛門が身の上じやな。

宗吾 ハッ。御意にござります。村方一同のお願いは、右獄屋につながれます者どもが妻子の歎きもいかばかり、この儀御賢察願わしゅう存じます。まった親藤左衛門儀は、前々より村役をも相勤めますれば、多勢にかわって獄屋につながれ、足かせ手かせの重きお咎め受けるも、常の儀でもござりまするが、寛永四年二月より手前へ家名を譲りまして、只今にては隠居の身分、老年よ

られた養父を永く獄屋に入れましては、もしもの事でもござりましては居ても立ってもいられませぬ。この儀をお汲みわけ下さりまして、獄屋につながりましたる数十人の者ども、かつは父藤左衛門が身の上、ひとえに御免の程願わしゅう存じまする。

隼人 オ、聞き届けた。明朝、殿へお目見得なし、その節一々言上なし、藤左衛門はじめそれ／＼の者ども牢舎御免を願うてつかわそう。

宗吾 ハ、ありがとう存じまする。

玄蕃 イヤ、そりやなるまい。

隼人 そりや又なげに。

玄蕃 さればでござる。去年殿様おふれ出しに相成りし年貢の増米こばみしゆえの乱暴とは、コリヤ山住五平太が注進によって明白だ。

五平 かような言いのがれを拵えて、それをかどに百姓どもが乱暴狼藉、いずれ徒党に相違ない。

宗吾 イヤ／＼いかようにおっしゃっても、この儀について徒党などとは。

玄蕃 さつするところ、我が君へ野心をさしはさむ者に頼まれたに相違あるまい。いよくもって徒党だ。

宗吾 何ゆえあって徒党などとは、
玄蕃 イヤ、徒党だ／＼、それ。